



第24回福岡アジア文化賞 受賞記念

## ナリニ・マラニ 特別展示

2013年9月12日（木）～ 12月25日（水）  
アジアギャラリーA

ハムレット・マシン (1999-2000年、4チャンネルビデオ (各19分33秒)、塩)

監督：ナリニ・マラニ  
撮影：金光寛明 石川誠治 野崎史郎  
ナリニ・マラニ  
編集：ナリニ・マラニ 黒岩俊哉  
ナンディニ・ベディ  
音：ナリニ・マラニ  
パフォーマンス：原田伸雄  
英語ナレーション：ナンディニ・ベディ  
制作：福岡アジア美術館  
福岡市文化芸術振興財団  
ナレーション日本語訳：  
岩淵達治・谷川道子訳『ハムレットマシーン——  
シェイクスピア・ファクトリー [ハイナー・ミュラー  
・テキスト集1]』(未来社、1992年)より



福岡アジア美術館で半年間の滞在中に制作されたビデオ・インスタレーション。アジ美で展示された後、世界の20都市以上で展示された。

シェイクスピア原作をドイツの作家ハイナー・ミュラーが脚色した戯曲『ハムレットマシーン』に基づき、インド建国時のガンジーやネルーの理想主義と、1990年代に拡大していったヒンドゥー原理主義など、対立する思想のはざまに、どちらの道を選ぶのか迷い、結果的にまちがった決断をくだしてしまうハムレットと、今日のインドの政治状況を重ねあわせている。

中央画面では男性性を強調したヒンドゥー教徒が現れ、その男性（福岡の舞踏家・原田伸雄が演じた）はのちビジネスマンに変わり、多国籍企業や極右政治家のイメージが重ね合わされる。最後には、ヒンドゥー原理主義者の煽動で少数派のイスラーム教徒との対立が激化した1992-3年のボンベイ<sup>\*</sup>暴動を思わせるように紅蓮の炎に包まれ、「兄弟・姉妹である私たちがなぜこの国を破壊する？ ここでいっしょに生きないといけぬのに！」というヒンドゥー語の女性の叫びが繰り返される。

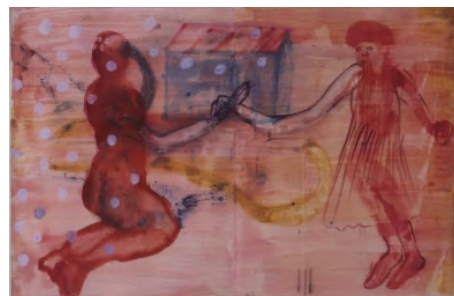
床の塩は、英国植民地時代に英国の専売制に抗議するガンジーが1930年におこなった「塩の行進」に基づき、諸宗教の共存を求めたかつての理想主義の立場から、現在の宗教対立を問いかけている。

\*1997年から公式にボンベイはムンバイに改称された。

しみ (2000年、ビデオ [7分30秒])

編集：山本公平、森田まさ美  
音：ナリニ・マラニ、山本公平

福岡アジア美術館で滞在中に制作した作品。コーティングした紙に水彩絵の具で絵を描いていき、その過程を制止画または短い動画で撮影したアニメーション。水彩絵の具の特質を生かし、イメージはまるで体液の移動や循環をしめすように現れては消えていく。長く延びる自分の乳房に悩まされたり蛇のような男性器に縛られる女性、泳ぐ人物、両手の間で破裂する爆弾などが描かれ、インドや世界各地で起こる紛争の根源にある身体、ジェンダー、暴力の問題を暗示する。



**略奪された岸辺** (1993/1999年、アクリル、木炭・硬質繊維板の上に石膏)

ムンバイのマックス・ミュラー・パワンで1993-4年に上演された、ドイツの劇作家ハイナー・ミュラーの戯曲に基づくパフォーマンス『メディアマテリアル』のために制作された作品。

『メディアマテリアル』の元となるエウリピデスの戯曲『メディア』は、親兄弟を捨てて異国でイアソンと結ばれた王女メディアが、権力と富を求めて自分を捨てたイアソンへの復讐のために自分の子を殺すという悲劇である。この古典劇を現代政治の文脈で再解釈したミュラー作品から想を得て、マラニ作品では、西洋の植民者と非西洋の被植民者、男性と女性との緊張関係が描かれる。

主画面は左から右へ進行し、ナチス時代の映画監督レニ・リーフェンシュタールとスーダンのヌバ族の男性が乗った植民者の船の到来、メディアとイアソンの出会い、自分を裏切ったイアソンに復讐をするメディアと続き、植民地化の歴史のなかでの女性と男性、西洋から非西洋へのまなざし、男性の権力などのテーマが混然となり、それらが右端の3枚でのテクノロジーによる環境破壊や、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が激しく衝突したボンベイ暴動という現代の悲劇の根源にあることを暗示する。

舞台となった空間の壁に合わせて分割した9枚のパネルに描かれたが、1999年にマラニが福岡アジア美術館で滞在制作したときに3枚の小パネルを追加した。



**カサンドラの贈りもの** (2009年、顔料インクによるデジタル印刷・ハーネミュレ竹紙[9点組])

カサンドラ(またはカッサンドラー)はギリシャ神話に登場するトロイアの王女。カサンドラはアポロンの恋人になって予知能力を得るが、アポロンの呪いのために彼女が予言する危機は無視されてしまう。カサンドラの悲劇は、真実を語る必要性と、女性の声に耳を傾けない男性社会への批判という、マラニにとって重要なテーマを表す。

全9点には順番と個々の題名がつけられているが、ひとつの物語を語るのではなく、人間の身体を拘束・制御するもの、爆撃機、むきだしの脳・筋肉・臓器に還元された人間、しみのような形や弱々しい生き物にひそむ生命と意志など、マラニの他の絵画や映像作品の基調をなすイメージが集積されている。

- 1 記憶
- 2 見つめる少女
- 3a アイデンティティの臨界
- 3b エロス
- 4 子ども時代の恐れ
- 5a カサンドラの贈りもの
- 5b つらい思い出
- 6 戦争ゲーム
- 7 触覚



1



3a



4



5



6



7